Ⅱ．部門報告

先駆的学習支援部門

坪倉繁美、境原三津夫、山田正実、後田穣、野口裕子

先駆的学習支援部門は、看護・医療・福祉分野の研究や実践に関する新しい知見やトピックスについて著名な学識者あるいは先駆的な活動を行っている実践者を招き、公開講座やシンポジウムを開催することにより、地域住民の方々に学習の機会を提供している。平成 26 年度は「市民公開講座」と上越教育大学との連携事業である「上教大・看護大連携公開講座」を開催した。

1　市民公開講座

テーマ　生活習慣病としてのうつ病
日　時　平成 26 年 11 月 14 日(金)　18:00～19:30
講　師　井原　裕　先生
獨協医科大学越谷病院こころの診療科
教授(診療部長)

講師紹介

東北大学医学部を卒業し医師、ケンブリッジ大学大学院の医学博士を取得。研究分野は、精神病理学、司法精神医学で、数多くの刑事・民事の精神鑑定も行っている。日本精神病理学会評議員、日本司法精神医学会評議員、日本うつ病学会評議員を務める。

現在は、獨協医科大学越谷病院こころの診療科教授(診療部長)である。著書は「生活習慣病としてのうつ病」弘文堂(2013)、「プライマリケアの精神医学―15 症例、その判断と対応」中外医学社(2013)、「思春期の精神科面接ライブ―こころの診療室から」星和書店(2012)をはじめ多数ある。

講義内容

うつ病の多くは生活習慣病としての側面から「病気をみるよりも人間をみる」「症状よりも生活をみる」という精神療法の本質からうつ病を学ぶことをねらい、市民公開講座を開催した。講座の主な講義内容は以下のとおりであった。

うつ病の 8 割に薬は無意味であり、薬の礼讃の時代は終わった。そういう背景には、抗うつ薬で治る人が 60%、プラセボ(有効成分を含まない薬)でも治る人が 40%あるという。なかでも抗うつ薬でしか治らない人は限られたうつ病の 20%という。薬を飲んでもいいが劇的な効果は期待できない、つまり「うつ病に特効薬はない」、患者が治るとすれば、それは患者自身に内在する自己治癒力が発揮された場合だけである。「うつ病を治せる特殊技法はない」というのである。治るためにできることがあるとするならば、患者さん自身の治る力が治してきたという。これは自助努力によるところの規則正しい生活をし、悪しき生活習慣を取り除くことである。食事、運動、喫煙、飲酒、睡眠の生活習慣を見直すことが重要である。なかでも睡眠が最も大事である。より正確に言うと、活動による疲労と睡眠による疲労回復の織りなすサインカーブが重要である。ごろごろとした単調な生活やストレスがない、サインカーブの疲労と睡眠のカーブがゆるやかな生活は健康を損なう可能性がある。疲労と睡眠のサインカーブがはっきりと見てとれるような、めりはりの利いた生活を確保することが重要である。からだを動かさなければうつは悪くなる一方である。ヘルシーな生活を確保するとは、睡眠がとれるような活動を意識した生活を行うことである。

参加者の状況

(1)参加者　249 人

(2)アンケート結果による評価

①アンケートの回収 227 人(91.2%)

②講師の話の全体的な感想

非常によかった	132 人(58.1%)
良かった	81 人(35.7%)
普通	7 人(3.1%)
少し難しかった	1 人(0.4%)
難しかった	0 人(0.0%)
無回答	6 人(2.6%)

③感想の一部

- 生活に活かせる内容で良かった。
- 睡眠・活動のバランスがいかに大事かがよくわかった。
- うつ病の治療イコール内服という考えがあったが、生活習慣を整えることでうつ病さえも回復するというができるという考えは非常に新鮮であった。

２　平成 26 年度　上教大・看護大連携公開講座

テーマ　発達障害と子育て支援～医療、福祉、教育の役割～

日　時　平成 26 年 7 月 12 日(土)　13:30～15:30

場　所　新潟県立看護大学

講　師

基調講演

講　師　境原　三津夫　(新潟県立看護大学　教授)

「発達障害の理解―医療ができること―」

加藤　哲文　(上越教育大学　教授)

「就学前の子育て支援と移行期支援」

パネルディスカッション

パネリスト　沼田　夏子　(新潟いなほの会　役員)

「親の想いと会の活動」

梶原　亜紀子　(上越市すこやかなくらし支援室　主任　臨床心理士)

「すこやかな子どもの育ちのための親支援の取組～親子コミュニケーション支援について～」

講座の内容

基調講演

境原三津夫先生は、「発達障害の理解―医療ができること―」と題して基調講演を行った。

発達障害は神経における発達の障害という意味であり、自閉症、アスペルガー障害、注意欠如/多動性障害、学習障害などを含む概念である。平成 25 年 5 月にアメリカ精神医学会の診断基準が見直され、自閉症とアスペルガー障害の区別がなくなり、両者をまとめて自閉症スペクトラム障害ということになった。発達障害は脳の機能障害と考えられているが、子どもの脳は発達の途上にあり、ある部分の働きが少しくらい悪くても他の部分が補うように発達していく。このような発達を促すには、教育や福祉の視点を取り入れた総合

的な支援に取り組む必要があるという主張であった。

加藤哲文先生は、「就学前の子育て支援と移行期支援」と題して基調講演を行った。
幼児期・学齢期の発達障害児の支援は、集団経験や社会参加の機会を確保し、その児なりの参加の仕方・行動の仕方を把握し、実生活で持つ能力を発揮させることである。新しい環境に移行する時期である移行期には、児とその家族に問題が起きることを前提として支援計画が必要である。支援者は、親や家族の子育ての苦労を理解し寄り添い、その家族らしさを尊重し、障害の有無よりも個別の困っていることなどの教育ニーズを重視して支援してほしいという主張であった。

パネルディスカッション

パネリストの沼田夏子先生は、当事者である親の想いを紹介した。
専門家であっても人によっては、どうしてよいか分からない母親に向かって「あなたが指導者なんですよ。あなたがしないで誰がするの」などと言われる。しかし現実には相談するところも支援者もいない。まわりは発達障害の理解は低く、偏見を持ってみられるという状況である。とかく「保護者が受容すればいい」などとも言われがちであるが、保護者は一生受容なんかできない。子どもをなんとかしなければならないという気持ちであり、私が死んだら誰がこの子を支えるのだと、親は一生悩みながら生活するということを是非わかってほしい。それには支援者なる多くの人々や団体とネットワークを繋げていくことが必要である。

パネリストの梶原亜紀子先生は、上越市の取り組みを紹介した。
子育てに関する情報があふれ、経済的・地域的な課題が複合的に生じてきている中で、小学校低学年までの親子を対象に「親子コミュニケーション支援」を実施している。これは、親が子どもの基本的な育ちを理解して、発達段階に応じた適切な関わりや親自身のこころの安定を図ることを目的としており、親子に寄り添い子どもへの関わりを一緒に考え、子育てに関する悩みを抱える親同士のつながる機会を作ることで孤立感の軽減や仲間同士のサポートグループ作りをめざすという取り組みである。

シンポジウムにおける意見交換

発達障害のある子を支援するには、各専門分野が縦割りで療育するのではなく、ひとりひとりの子に最もよい療育をバランスよくアレンジすることが必要である。行政も親子コミュニケーション支援などを行っており、地域の社会的資源を有効に活用することで、医療・教育・福祉が連携する総合的な支援体制をつくっていくことが重要である。

参加者の状況

(1)参加者　192 人
(2)アンケート結果による評価
①アンケートの回収 157 人(81.8%)
②講師の話の全体的な感想

非常によかった	75 人(47.8%)
良かった	69 人(43.9%)
普通	4 人(2.5%)

少し難しかった　0 人(0.0%)
難しかった　0 人(0.0%)
無回答　9 人(5.7%)

③感想の一部

・限られた時間で多くの話題提供(医療・福祉・教育・親)があり、多角的にバランスよく意見を聞くことができ、大変参考になった。
・親としての生の声が聞け、話に重みがあり参考になった。
・大人の発達障害、職場での人の育てかたをどうしたらよいかを聞きたい。

発達障害 どう向き合う

看護大・上教大連携公開講座 講師4人が語る

県立看護大（渡邉隆学長）と上越教育大（佐藤芳徳学長）はこのほど、県立看護大で両大連携の公開講座「発達障害と子育て支援」を開いた。約200人が医療、福祉、教育の視点から発達障害と子育てをどのように支えるかについて話を聞いた。

公開講座は、両大が協力してそれぞれの教育研究の充実を図り、地域社会に貢献することを目的に行われている。

講師は両大の教授、保護者団体役員、上越市役所職員の4人。医療、教育、子育て、行政の立場から発達障害とどう向き合うかを語り、現在の発達障害への支援状況についても問題点を挙げた。

後半の質疑応答で「発達障害を学校の遊びで抑えるには」「障害のある子とどう接したらいいか」など質問が寄せられた。

質疑応答で講師4人が参加者からの質問に答えた

上越タイムス 2014.7.22

地域社会貢献部門

飯吉令枝、大久保明子、片平伸子、渡邉千春、竹原則子、安藤亮、風間みえ、内藤みほ

Ⅰ　看護大いきいきサロンの開催

1. 平成 26 年度看護大いきいきサロンの開催状況

地域社会貢献部門では、地域住民の方々が気軽に大学に足を運び、健康について関心を寄せ、学び合う場を目指して平成 21 年度から開催してきた「看護大いきいきサロン」を継続して企画・運営した。

H26 年度は、H25 年度と同様に年 6 回、平日夕方に実施した。講師は上越地域で開業している医師、上越地域の病院の認定看護師および理学療法士、大学の教員等で、それぞれの講師から専門とするテーマでの講演のあと、地域住民の方々からの質問に答えてもらう時間を設けた。

1)　看護大いきいきサロンの開催日時およびテーマ・講師と参加人数

平成 26 年度のテーマ、講師は以下のとおりである。

表 1　平成 26 年度看護大いきいきサロンの開催日時およびテーマ・講師と参加人数

回	日時	テーマ	講師	参加人数
第 1 回	5/22(木) 18:30～19:30	きき上手は、話させ上手 ～“きく”ということについて一緒に考えてみませんか～	新潟県立看護大学 准教授　岡村 典子	139 人
第 2 回	6/19(木) 18:30～19:30	自分に合った睡眠パターンをみつけよう	上越教育大学 教授　増井 晃　先生	107 人
第 3 回	7/10(木) 18:30～19:30	どうしたらいい？ 認知症を抱えている方との関わり方	新潟労災病院 認知症看護認定看護師 村田 悦子　先生	122 人
第 4 回	9/18(木) 18:30～19:30	肩こりについて	上越地域医療センター病院 リハビリテーションセンター 室長　大竹 朗　先生	109 人
第 5 回	10/16(木) 18:30～19:30	漢方診療の基礎、わかり易い漢方 ～これで悩みは解決する～	高田メディカルクリニック 院長　古川 一雄　先生	91 人
第 6 回	11/13(木) 18:30～19:30	貧血は、いろんな病気の初期症状です	新潟県立看護大学 教授　野村 憲一	81 人

平成 26 年度の参加者は 649 人であった。

平成 21 年度から開始して、いきいきサロンの参加者は通算 3,252 人となった。

2)　看護大いきいきサロン参加者のアンケート結果

(1)　参加者の年代・性別

60 歳代が 32.4%と最も多く、次いで 50 歳代が 21.7%、70 歳代が 16.8%であった。

性別では、男性が 29.0%、女性が 71.0%であった。

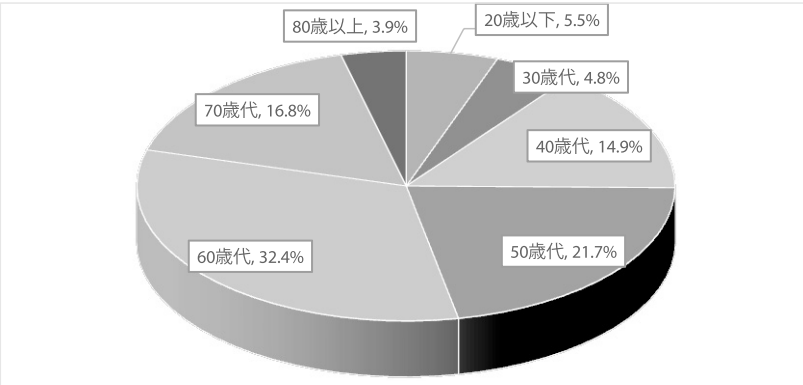

図1　参加者の年代

(2)　参加回数

これまでに 1~5 回参加したことがある人が 39.1%と最も多く、次いで初めて参加した人が 35.8%であった。

(3)　周知方法(複数回答)

「ポスター・チラシを見て」参加した人が 191 人(34.9%)と最も多く、次いで「新聞広告」185 人(33.8%)、「上越広報誌」100 人(18.2%)であった。

「ホームページを見て」参加した人は 16 人(2.9%)、「ラジオ・テレビの宣伝」で参加した人は 5 人(0.9%)と少なかった。

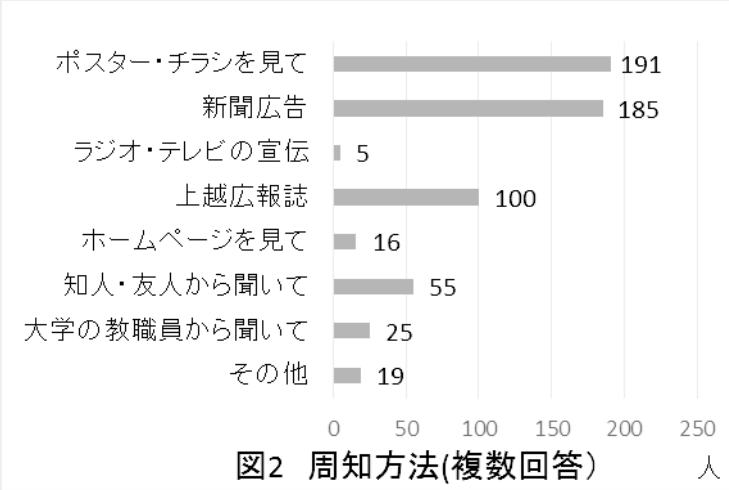

図2　周知方法(複数回答)

(4)　参加理由(複数回答)

参加理由では、「テーマに興味・関心があったから」が 423 人(77.2%)と最も多く、次いで「講師の話を聞きたかったから」が 103 人(18.8%)であった。

(5)　講師の話についての感想

全体では、「非常に良かった」と回答した人は 52.0%、「良かった」と回答した人は36.7%であった。

6 回中 5 回の講義では、9 割

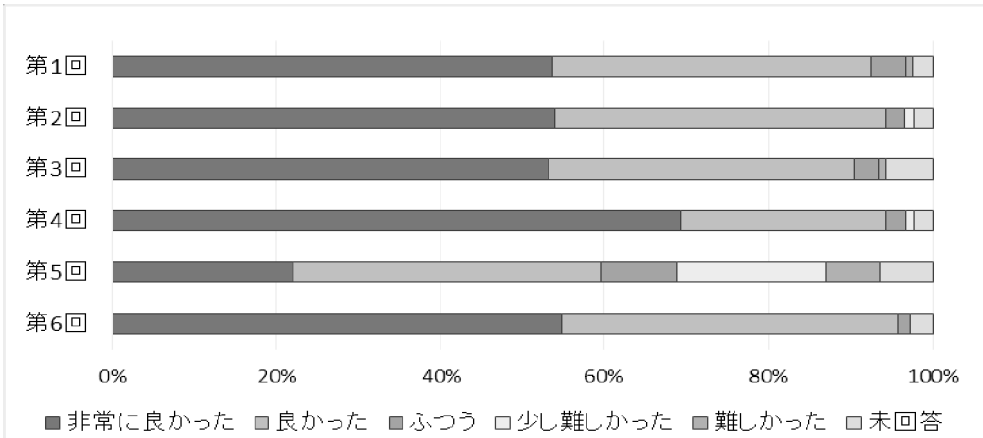

図3　感想

以上の人が「非常に良かった」「良かった」と回答していた。

(6)　健康でいきいきと生活するための工夫や知識を得ることができたか

全体では、「とてもできた」と回答した人は51.7%、「少しできた」と回答した人は37.9%であった。

6回中3回の講義では、9割以上の人が「とてもできた」「少しできた」と回答していた。

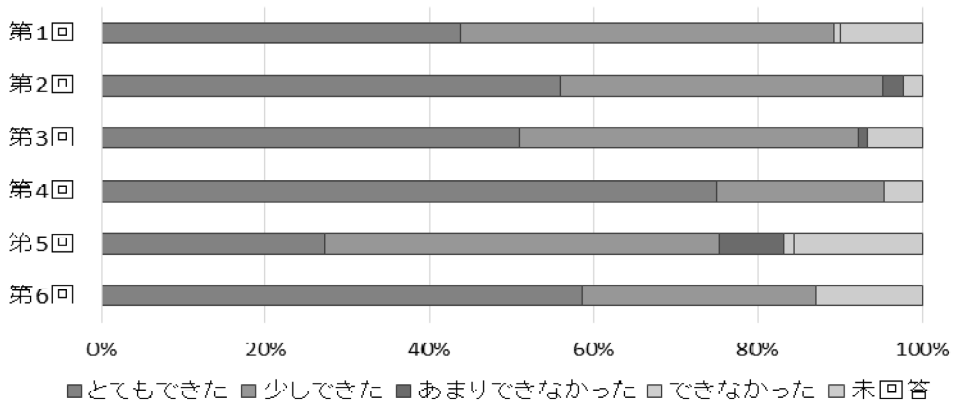

図4　工夫や知識を得ることができたか

(7)　今後とりあげてほしいテーマ

今後とりあげてほしいテーマとして、多かった項目は「ストレス」207人、「認知症」170人、「生活習慣病」155人、「肩こり、腰痛」123人、「目の病気」112人、「介護の話」106人などであった。その他自由記載では、栄養・食事の話や感染症に関する内容、うつ、介護制度の活用方法など多くのテーマがあげられていた。

2. いきいきサロンの運営

1)　企画実行メンバー

地域社会貢献部門のメンバーで講師交渉と打合せ、サロン通信の作成、必要物品の購入、学生アルバイトの依頼、当日運営を役割分担して行った。

ポスター・チラシの作成・発送、講師資料の印刷等については、看護研究交流センター事務局の事務職員から、当日の受付と会場準備・片付けは、地域社会貢献部門のメンバーが看護研究交流センター事務局と共に行った。

当日の運営では、学生アルバイト2名から会場準備と受付を行ってもらった。

2)　広報活動

看護研究交流センターの案内リーフレットの発送、看護大いきいきサロン通信の発行(2回)の他、毎回実施前にポスター・チラシの作成と配布、大学ホームページでの情報公開、市の広報誌および新聞等への掲載を行った。

3)　講師謝礼

学外からの講師には1回1万円および交通費を支払った。

4)　参加者への接待

昨年と同様、参加者に対してお茶のサービスを行った。初回参加者には講義資料の保管用ファイルを配布した。また開始前にリラックスできるような音楽を流すことや、机にテーブルクロスをかけることで、サロンの雰囲気を出すための工夫を行った。また、サロンの最後に他のセンター事業等のお知らせと参加の呼びかけを行い、他部門の事業の宣伝も努めた。

3.　平成 26 年度の評価と今後の課題

今年度は PR 効果もあり参加者が昨年度と比べて 165 人増加した。一昨年の 8 回実施の参加人数と比べても参加者は増加している。6 年間で通算 3,000 人を超え、地域住民の方々に周知されてきていると思われる。また、参加者はテーマに興味・関心があって参加される方が多く、健康について地域住民の方々が気軽に学べる場になってきていると考える。

その反面、参加者が 120 人超えると会場がとても狭い状況であり、次年度は参加者が多いことが予測されるテーマのときは、会場の配置を工夫していく必要があると思われる。また、今年度はリピーターへの案内を行ったが、その効果についても今後評価していく必要がある。

さらに、今年度はケーブルテレビが何回か来ており、開催直前にその旨を説明した。次年度は、テレビに映りたくない人はカメラより後ろに座れるよう、撮影が入ることを伝える貼り紙を受付に用意する必要があると考える。

昨年度から引き続いている課題としては、病院等での健康講座とのすみ分けや新たな地域のホームドクターの依頼があげられる。病院等で実施している健康講座と競合しないよう、看護や健康に関するテーマで、いきいきと生活していくことを応援できるような内容にしていく必要がある。また、以前来てもらった講師の中で参加者からの希望が多い講師には、テーマをかえて依頼し、地域住民の方のニーズに合った内容をさらに検討していきたいと考える。

看護職学習支援部門

橋本明浩、原等子、高林知佳子、飯田智恵、加賀美亜矢子、
中澤紀代子、石原千晶、髙塚麻由、川島良子、鬼形充智

Ⅰ　本部門の事業目的

新潟県内、特に上越地域の看護職の総合的な資質向上を目指し、様々な学習および研修の機会を提供する。このことにより看護職の資質向上をはかり、県民のヘルスケアの質向上を目指す。加えて、卒業生の卒後教育も視野に入れた看護職の復職支援を行う。

Ⅱ　平成 26 年度の事業の概要

本部門では，看護職向け公開講座(専門公開講座＝どこでもカレッジ公開講座)14 回開講(昨年度 9 回)、どこカレ通信 5 回発行、バーチャルカレッジ開講(年間 500 万アクセス、昨年度 253 万)した。今年度は特に参加者個々のニーズに対応すべく少人数のグループワークを中心に実施した。参加人数としては多くはないが、参加者一人一人の声が聞こえる充実した講座が多かった。加えて本年度実施した ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラムは好評のうちに終了し、受講希望の声に応えて当初予定より多い 49 名の修了生を出した。加えて本年度は新潟県看護協会と連携して「就職していない看護職員(保健師、助産師、看護師、准看護師)の再就職を支援」するための再就職に向けた知識や技術を身につける講習会を実施した。

１．専門公開講座（どこでもカレッジ公開講座）

専門公開講座は 14 回(前年度 9 回)開講した。看護職向けとしているが、ほとんどの講座を介護職を中心に多職種にも開放している。最新医学の講座 2 題は参加条件を設けず一般に開放した。その他、看護研究支援(4 題)、看護実務(ユビキタス)支援(2 題)、看護実践スキルアップ(6 題)の講座を開催した。

専門公開講座には多職種の参加も毎回みられ、今年度はグループワークも多かったことから、参加者から共に学ぶことの喜びの声などだけでなく、大学院進学への希望までもが聞かれた。(表 1　専門公開講座開催実績参照)

２．どこカレ通信

公開講座やバーチャルカレッジのメイトに対する周知を目的に、どこカレ通信をメイト向けに発行している。内容は主に専門公開講座の開催案内や実施報告などを中心に 5 回発送した。実績を以下に示す。(表 2　どこカレ通信発行実績一覧参照)

なお、本学のリポジトリ等に収録して県下に公開している。

送付先(メイト・病院・特老、介護施設・看護学校・訪問看護ステーション)

附録資料参照

３．バーチャルカレッジ

今年度の新規コースは専門公開講座の特性から難しかったが、過去のコンテンツには依然関心を持たれているようで、平成 26 年度 12 月までに 4,914,279 のページビューがあった。

月別の利用件数を以下に示す。なお、Google、Yahoo などの検索エンジンからの自動プログラムからのアクセスは除外してある。(表 3　バーチャルカレッジ月別アクセス数参照)

４．メイト

学びたい希望を持つ方々へ学習の機会を提供する「どこでもカレッジプロジェクト」では、ともに学習する人々をメイトと呼び、別途申請書による登録を行い、どこカレ通信などの送付を行い公開講座、市民講座、大学院等の案内をした。

本年度新規加入は 12 名、退会 3 名、3 月末現在メイト登録数は 131 名である。

表１　専門公開講座開催実績

区分	講座名	開催日	受講者数	金額	講師
看護研究支援	看護研究のテーマをみつけよう	6 月 28 日(土) 9:30～11:30	44	無料	石田和子(本学)
	さあはじめよう看護研究 ～研究計画書の書き方まで～	8 月 2 日(土) 13:00～16:00	28	無料	石田和子(本学)
	院内発表～わかり易いプレゼンテーションをするために～	9 月 25 日(木) 10:00～15:00	8	2,000 円	永吉雅人(本学)
	看護研究のための EXCEL 統計解析入門	9 月 26 日(金) 10:00～16:00	12	2,000 円	橋本明浩(本学)
看護実務支援	インターネット検索技術入門	9 月 27 日(土) 10:00～12:00	6	1,000 円	橋本明浩(本学)
	院内マニュアル～見易く使いやすいマニュアル作成入門～	9 月 27 日(土) 13:00～16:00	10	1,000 円	橋本明浩(本学)
最新医学	最新遺伝子の話題から	7 月 5 日(土) 13:00～14:30	42	無料	野村憲一(本学)
	認知症の診断とケア	10 月 12 日(日) 10:30～14:30	117	無料	川崎医科大学神経内科特任准教授、認知症疾患医療センター副センター長 片山禎夫先生
看護実践スキルアップ	ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラム「エンド・オブ・ライフ・ケアに関わる看護師のための研修会」	7 月 19 日(土) 7 月 20 日(日) 9:00～17:00	49	4,000 円	酒井禎子(本学・ELNEC-J 指導者)他
	フィジカルアセスメントの基礎と SOAP の実際	10 月 25 日(土) 13:00～16:00	28	1,000 円	原等子(本学)
	高齢者の爪ケア	11 月 8 日(土) 11:00～15:30	30	1,000 円	新潟県立小出病院 慢性疾患看護 CNS 上原喜美子先生 新潟県立中央病院 糖尿病看護 CN 武田織枝先生
	気管吸引技術とそのエビデンス	11 月 22 日(土) 13:00～15:00	22	1,000 円	竹原則子(本学)
	呼吸のフィジカルアセスメント	11 月 29 日(土) 9:00～12:00	26	1,000 円	飯田智恵(本学)
	自分の助産診断・技術学を再構築してみよう(妊娠・分娩期)	12 月 6 日(土) 13:00～16:00	13	1,000 円	髙島葉子(本学) 髙塚麻由(本学) 風間みえ(本学)

表 2　どこカレ通信発行実績一覧

	号名	発行日	送付部数	主な内容
1	24 号	5 月 10 日	254	公開講座の案内、再就職支援相談会、大学院入学相談等
2	25 号	8 月 5 日	256	近況報告と公開講座の案内、地域課題研究発表会の案内
3	26 号	9 月 25 日	253	近況報告と公開講座の案内、市民公開講座の案内
4	27 号	10 月 18 日	255	近況報告と公開講座の案内、地域課題研究案内
5	28 号	1 月 25 日	153	近況報告と来年度公開講座申込みについて

表 3　バーチャルカレッジ月別アクセス数

月	4	5	6	7	8	9	10
本年度	459,097	987,744	739,784	600,763	395,112	471,201	464,346
昨年度	341,092	405,270	670,107	354,723	144,119	365,453	251,843
増加率	34.6%	143.7%	10.4%	69.4%	174.2%	28.9%	84.4%

月	11	12	合計
本年度	402,280	393,952	4,914,279
昨年度	-		2,532,607
増加率	NA	NA	94.0%

集計の一例

時間	IPアドレス	ユーザフルネーム	操作	情報
月 2015年 02月 2日 10:49	192.168.9[redacted]	橋本 明生浩	course report log	地域医療・包括ケアの未来を拓く多職種連携in上越
月 2015年 02月 2日 10:09	68.180.22[redacted]	ゲストユーザ	folder view	動画
月 2015年 02月 2日 00:31	68.180.22[redacted]	ゲストユーザ	forum view forums	
日 2015年 02月 1日 12:14	68.180.22[redacted]	ゲストユーザ	course view	地域医療・包括ケアの未来を拓く多職種連携in上越
土 2015年 01月 31日 08:04	5.255.253[redacted]	ゲストユーザ	course view	地域医療・包括ケアの未来を拓く多職種連携in上越
土 2015年 01月 31日 04:07	126.118.3[redacted]	ゲストユーザ	course view	地域医療・包括ケアの未来を拓く多職種連携in上越
金 2015年 01月 30日 13:06	157.55.39[redacted]	ゲストユーザ	resource view	飯塚先生配布資料
金 2015年 01月 30日 04:24	157.55.39[redacted]	ゲストユーザ	folder view	動画02
火 2015年 01月 27日 11:56	211.12.23[redacted]	ゲストユーザ	course view	地域医療・包括ケアの未来を拓く多職種連携in上越
火 2015年 01月 27日 01:00	68.180.22[redacted]	ゲストユーザ	forum view forums	
火 2015年 01月 27日 00:48	68.180.22[redacted]	ゲストユーザ	folder view	動画01
火 2015年 01月 27日 00:48	68.180.22[redacted]	ゲストユーザ	folder view	動画3
火 2015年 01月 27日 00:48	68.180.22[redacted]	ゲストユーザ	forum search	
月 2015年 01月 26日 12:48	66.249.67[redacted]	ゲストユーザ	course view	地域医療・包括ケアの未来を拓く多職種連携in上越
木 2015年 01月 22日 04:27	5.255.253[redacted]	ゲストユーザ	course view	地域医療・包括ケアの未来を拓く多職種連携in上越
日 2015年 01月 18日 15:21	66.249.75[redacted]	ゲストユーザ	folder view	資料

資料 1－どこカレ通信 28 号

第28号　2015/1/25

どこカレ通信

新潟県立看護大学看護研究交流センター
「どこでもカレッジプロジェクト」では
看護師の学び直しを支援します。

新しい年を迎え、皆さまにおかれましてはいかがお過ごしでしょうか。
昨年中は皆さま方のご協力のもと、計画通りに公開講座を開催することができました。
次年度も皆さまのご希望に添えますよう努力してまいります。
本年もよろしくお願いいたします。

近況報告

11月8日（土）高齢者の爪ケア

講師：新潟県立小出病院 慢性疾患看護 CNS 上原 喜美子
　　新潟県立中央病院 糖尿病看護 CN 武田 織枝

上原 CNS、武田 CN を講師にお招きした本講座、30 名の看護職・介護職の方が受講されました。「爪切りに対する知識が広がった。特にどこまで爪を切れば良いのか基準を知ることが良かった」、「普段行っている爪切りについて専門的に学ぶ機会となり、自分が行っていた爪切りの間違った方法に気が付くことができた」、「今まで容赦なくばちばち爪を切っていたが考えが改まった」といった感想がありました。

日常的なケアを見直すことは自信を持って提供することにつながりますね。

11月22日（土）気管吸引技術とそのエビデンス

講師：新潟県立看護大学 助教 竹原 則子

22 名の方からご参加いただきました。ご参加いただいた受講生のみなさまの声です。「エビデンスに基づいた正しい手順を教えていただいてよかった」、「実際に器具、用具を使用して行えて良かった」、「注意しなければいけない点と根拠がしっかりと理解できてよかった」といったように、講義だけではなく、演習を通し体験的に学ぶことで、普段の実践を振り返るとともに、さらに多くの知識・技術を獲得することにつながったようです。

爪ケアとともに、明日からの実践に役立つ、学習の機会となりました。

12月6日（土）自分の助産診断・技術学を再構築してみよう（妊娠・分娩期）

講師：新潟県立看護大学 准教授 高島 榮子　助教 高塚 麻由　風間 みえ

当日の大雪にもかかわらず、13 名の助産師が県内から参加してくれました。講座終了時には、「助産師として最も基本的なことを改めて考えることが出来た」、「なんとなく、たぶん…という経験歴からの判断でなく、根拠に基づき判断、診断していくことの大切さを学ぶことができた」といった声が寄せられました。

お知らせ

平成 27 年度公開講座準備中!!

只今、平成 27 年度開催の公開講座について詳細を練っているところです。4 月下旬頃、公開講座一覧についてのご案内がお手元に届く予定です。関心あるテーマを見つけましたら、奮ってご応募くださいませ!!

編集後記

今年度は 14 講座を開催いたしました。受講いただいたみなさまからのご意見からは、普段の実践を振り返る機会となり、明日からすぐに役立つ講座であったことが窺われました。看護職支援事業としての役割を果せたことにほっとしております。次年度もご期待くださいませ。

公開講座申込み期間（設定）についてのお知らせ

次年度より各講座への申込み開始日を設けます。公開講座一覧にてご確認頂きますようお願い致します。
また、メイト会員の特典!! として、非会員に先行してお申込み頂けるようになります!! 奮ってご応募下さい!

連絡先：新潟県立看護大学　看護研究交流センター（専門職員：長谷川　受付時間：平日 9:30～16:00）
住所：〒943-0147 上越市新南町 240　電話番号：025-526-2822（直通・FAX 兼）
E メール：nirin@niigata-cn.ac.jp　ホームページ：http://www.nirin.jp/

資料 2－どこカレ通信 27 号

第27号　2014/10/18

どこカレ通信

秋晴れの心地よい、さわやかな季節となりましたが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。

今年度の公開講座も残りあとわずかとなりましたが、是非、足をお運び頂き一緒に学びあう機会となったらよいですね。

近況報告

9月25日（木）

院内発表　～わかりやすいプレゼンテーションをするために～

講師：新潟県立看護大学 准教授 永吉雅人

本講座には看護師、介護士の方々がご参加くださいました。講義はパソコンを使った資料の作り方やプレゼンテーションの仕方などで、参加者のみなさんにとっては、すぐにでも活用できるような学習となったようです。

研修後の感想には「わかりやすく、またすぐにでもやってみたい内容でした。自分で作ったパワーポイントをもとに、プレゼンテーションをすることもできよかったです。」「時間がもう少し欲しくなるくらい、内容が濃かったです」とありました。今回の学習を活かしたプレゼンテーション、職場の皆さんも楽しみでしょうね。

9月26日（金）

看護研究のためのEXCEL 統計解析入門

講師：新潟県立看護大学 教授 橋本明浩

9月27日（土）

インターネット検索技術入門

院内マニュアル　～見易く使いやすいマニュアル作成入門～

～26日と27日の２日間は、橋本先生から講義いただき、大勢の方からご参加いただきました。～

「少し難しかったです」という感想もありましたが、「基本的なことを知ることができてよかったです」と、看護研究に役立つ学習の機会となりました。

インターネット検索技術入門では「検索方法が分かりよかった」「基本的なことが理解できた」という感想が寄せられました。また、院内マニュアルでは、「これからマニュアル作りが楽しくなりそうです」と、早速、職場で活用できる学習となりました。

今後の公開講座

自分の助産診断・技術学を再構築してみよう

（妊娠・分娩期）

12月6日（土）13:00～16:00

講師：新潟県立看護大学

准教授　髙島葉子　他

参加費：1000円　定員：20名

まだまだ募集中!

お知らせ

「平成27年度地域課題研究」公募中！

日々現場で抱えている疑問、関心事…

本学の教員と一緒に研究してみませんか？

公募期間：10月1日（水）～12月19日（金）

＊10万円を限度に助成金がでます。

＊本学ＨＰより公募要領・必要書類を入手できます。

連絡先：新潟県立看護大学　看護研究交流センター（専門職員：長谷川　受付時間：平日 9:30～16:00）
住所：〒943-0147 上越市新南町 240　電話番号：025-526-2822（直通・FAX 兼）
Ｅメール：nirin@niigata-cn.ac.jp　　ホームページ：http://www.nirin.jp/

資料 3－どこカレ通信 26 号

夏の暑さがやわらぎ、時折吹く爽やかな風に、秋の訪れを感じる季節になりました。秋と言えば運動の秋、芸術の秋、食欲の秋など様々な秋がありますが、皆様は今年の秋、いかがお過ごしでしょうか。

今後も充実した公開講座を企画しています。ぜひ、ご参加いただき、学びの多き秋にしてみませんか。

近況報告

7 月 19 日（土）～20 日（日）

ELNEC-J コアカリキュラム　看護師教育プログラム

「エンド・オブ・ライフ・ケアに関わる看護師のための研修会」

講師：新潟県立看護大学教授　石田和子

准教授　酒井禎子、ELNEC-J 指導者

グループワークの成果を発表しています

本研修に対するお申込みが大変多く、予定した定員を急遽増やして行われ、看護職を中心に 49 名の方が参加されました。研修は 2 日間にわたり、エンド・オブ・ライフにある患者さんとご家族へのケアについて、講義やグループワーク、ロールプレイを通して学習しました。参加された方々と積極的に意見交換がなされ、改めて皆様の関心の強さを実感しました。

研修後の感想として「エンド・オブ・ライフ・ケアの意味や、それを実践していくために必要な概念が学べて有意義だった。」「終末期の様々な場面で活用できると感じた。」「今までの自分を振り返ることができた。」「新しい発見がたくさんあった。」など多数寄せられ、研修は盛況のうち終了いたしました。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆平成 26 年度　どこカレ公開講座のご案内◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

フィジカルアセスメントの基礎と SOAP の実際

10 月 25 日（土）13：00～16：00

講師：新潟県立看護大学

准教授　原等子

参加費：1000 円　　定員：30 名

気管吸引技術とそのエビデンス

11 月 22 日（土）13：00～15：00

講師：新潟県立看護大学

助教　竹原則子

参加費：1000 円　定員：30 名

呼吸のフィジカルアセスメント

11 月 29 日（土）9：00～12：00

講師：新潟県立看護大学

講師　飯田智恵

参加費：1000 円　定員：30 名

自分の助産診断・技術学を再構築してみよう（妊娠・分娩期）

12 月 6 日（土）13：00～16：00

講師：新潟県立看護大学

准教授　高島葉子

助教　高塚麻由　　他

参加費：1000 円　定員：20 名

市民公開講座のお知らせ

『生活習慣病としてのうつ病』

11 月 14 日（金）18：00～19：30

新潟県立看護大学　第 1・2 ホール　定員 100 名

講師　獨協医科大学越谷病院　こころの診療科

教授　井原　裕　先生

※参加は無料ですが参加を希望される方は

11 月 7 日（金）までにお申し込みください。

連絡先：新潟県立看護大学　看護研究交流センター（専門職員：長谷川　受付時間：平日 9：30～16：00）
〒943-0147　上越市新南町 240　　電話番号：025-526-2822（直通・FAX 兼）
E メール：nirin@niigata-cn.ac.jp　　ホームページ：http://dokokare.nirin.jp

資料 4－どこカレ通信 25 号

第 25 号　2014. 8.5

ドコカレ通信

新潟県立看護大学看護研究交流センター
「どこでもカレッジプロジェクト」では
看護師の学び直しを支援します。

暑い日が続いておりますが、皆様はいかがお過ごしでしょうか。

本学では、窓際にゴーヤやフウセンカズラの苗を植えて、大きなグリーンカーテンを作成しました。太陽の光をたくさん浴びて、大きく育って欲しいと思います。

今年も、エコ対策をして快適な夏を過ごしましょう。

近況報告

6 月 28 日（土）
「看護研究のテーマを見つけよう」
講師：新潟県立看護大学
成人看護学　教授　石田和子

今年度、最初の公開講座は「看護研究のテーマを見つけよう」です。当日は、看護職を中心に 44 名の方が参加されました。講師の豊富な臨床経験に基づいて、これまでの看護研究に関わる体験談を交えながら看護研究のテーマの見つけ方について説明がありました。

参加者から「テーマを見つけることを難しく考えていただけに、気持ちが楽になった。」「研究をやりたいと思っていても、勉強不足で手が出せなかったが、研究をやってみようと思った。」などの感想が多数寄せられました。

今後の公開講座

院内発表
～わかり易いプレゼンテーションをするために～
9 月 25 日（木）10：00～15：00
講師：新潟県立看護大学准教授　永吉雅人
参加費：2000 円　定員：6 名

看護研究のための EXCEL 統計解析入門
9 月 26 日（金）10：00～16：00
講師：新潟県立看護大学教授　橋本明浩
参加費：2000 円　定員：20 名

インターネット検索技術入門
9 月 27 日（土）10：00～12：00
講師：新潟県立看護大学教授　橋本明浩
参加費：1000 円　定員：12 名

院内マニュアル
～見易く使いやすいマニュアル作成入門～
9 月 27 日（土）13：00～16：00
講師：新潟県立看護大学教授　橋本明浩
参加費：1000 円　定員：12 名

認知症の診断とケア
10 月 12 日（日）10：30～14：30
講師：川崎医科大学神経内科特任准教授、認知症疾患医療センター
副センター長　片山禎夫先生
参加費：無料　定員：80 名

フィジカルアセスメントの基礎と SOAP の実際
10 月 25 日（土）13：00～16：00
講師：新潟県立看護大学准教授　原等子
参加費：1000 円　定員：30 名

平成 25 年度　地域課題研究発表会のお知らせ

開催日：平成 26 年 9 月 20 日（土）13 時～14 時 40 分
場　所：新潟県立看護大学　第 1・2 ホール

県内の看護職と本学教員が共同して取り組んだ地域の看護実践における課題解決に向けた研究発表を行います。
参加費無料、事前申し込みは不要です。たくさんの方のご参加をお待ちしております。

編集後記

今年度、第 1 回公開講座がスタートしました。楽しく充実した講座になるよう、今年も多くの講座を企画しています。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

連絡先：新潟県立看護大学　看護研究交流センター（受付時間：平日 9：30～16：00）
住所：〒943-0147 上越市新南町 240　電話：025-526-2822（直通・FAX 兼）
E メール：nirin@niigata-cn.ac.jp　ホームページ：http://dokokare.nirin.jp/

資料 5－どこカレ通信 24 号

第24号　2014/5/10

どこカレ通信

新潟県立看護大学看護研究交流センター
「どこでもカレッジプロジェクト」では
看護師の学び直しを支援します。

皆様ご無沙汰しておりました。新年度の慌ただしさも落ち着きつつある頃でしょうか。大学周辺も桜色から一変。街路樹や芝生の緑が美しい季節を迎えました。
今年度も充実したプログラムとなるよう、公開講座の準備を進めております。楽しみにしていただければ幸いです。

平成 26 年度　どこカレ公開講座のご案内

昨年も公開講座に多数ご参加していただきありがとうございました。参加された皆様のご意見・ご感想等から、今年度は 14 講座を計画しました。ここでは 6 月開始のコースと 7 月開催分をご紹介します。その他の講座については、交流センターリーフレット等をご参照ください。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

● 看護研究支援

① 看護研究のテーマをみつけよう
6 月 28 日（土）9:30～11:00
講　師：新潟県立看護大学教授　石田和子
参加費：無料　　定員：80 名

② さあはじめよう看護研究 ～研究計画書の書き方まで～
8 月 2 日（土）13:00～16:00
講　師：新潟県立看護大学教授　石田和子
参加費：無料　　定員：40 名（①を受講した方が対象です）

これから研究に取り組む方、後輩の研究指導をするために学びたい方、既にスタートはしたけれど疑問をお持ちの方、一度研究をやってみたけれどあれでよかったのか振り返っておきたい方に朗報。臨床での看護研究の経験も豊かな講師が基礎からお話しします。

● 最新医学

最新遺伝子の話題から
7 月 5 日（土）13:00～14:30
講　師：新潟県立看護大学教授　野村憲一
参加費：無料　　定員 80 名

遺伝子と病気の関係、出生前診断、遺伝子治療といった、最新の知見をわかりやすくお話しします。看護職の方に限らずどなたでもご参加いただけます。

● 看護実践スキルアップ

ELNEC- J（エルネック ジェイ） コアカリキュラム看護師教育プログラム
～エンド・オブ・ライフ・ケアに関わる看護師のための研修会～
7 月 19 日（土）・7 月 20 日（日）9:00～17:00
講　師：新潟県立看護大学准教授　酒井禎子 他
参加費：4000 円（資料・2 日分の昼食代含む）　定員：30 名
定員 30 名

昨年「参加者みんなで一緒に学びあうことができました」とご好評をいただいた講座です。2日間、講師やグループメンバーと和やかに交流しながら、ともに学びを深めませんか。

昨年度の公開講座を収録したバーチャルコンテンツは現在作成中です。公開の準備が整いましたら、HP やどこカレ通信でお知らせします。

平成 26 年度 看護職再就職支援講習会

開催日　8 月 7 日（木）～12 日（火）
＊土日は休み
場　所　（上越会場）
新潟県立看護大学

最新の医療の動向、医療安全、感染管理、介護保険制度、フィジカルアセスメント、採血・輸液管理、認知症ケア、摂食嚥下・口腔ケア、褥瘡ケア、施設実習（希望者のみ）等、基礎を中心に総合的に学習できます。

近々、再就職をお考えの方だけでなく、自信がなくなかなか復職に踏み切れない方、当面は難しいけれど余裕ができたら復職したいと思っている方も参加されてみてはいかがでしょうか。詳しくは、下記ウェブサイトをご覧いただくか、新潟県立看護大学看護研究交流センターまでお問い合わせください。

・新潟県ホームページ　URL：
http://www.pref.niigata.lg.jp/ishikango/1356758919845.html
・新潟県看護協会ホームページ　URL：
http://www.niigata-kango.com/

大学院看護学研究科修士課程 入学相談会のお知らせ

日時　平成 26 年 9 月 20 日（土）
9:30～16:00（予定）
場所　新潟県立看護大学

大学院の入試や就学に関する相談に教員がお応えします。相談会当日は、2つの研究発表会（上越地域看護研究発表会、地域課題研究発表会）が行われます。併せてご参加ください。

詳しくは、大学 HP をご覧になるか、教務学生課教務係（025－526－2811）までお問い合わせください。

3 月末に大学 HP がリニューアルされました。働きながら学ぶ長期履修生の履修実例、在学生の声など、大学院生のキャンパスライフに関する情報も拡充されています。
URL：http://www.niigata-cn.ac.jp

連絡先：新潟県立看護大学　看護研究交流センター（受付時間：平日 9 時 30 分～16 時 00 分）
住所：〒943-0147 上越市新南町 240　　電話：025-526-2822（直通・FAX 兼）
E メール：nirin@niigata-cn.ac.jp　　ホームページ：http://dokokare.nirin.jp/

地域課題研究開発部門

石田和子、髙柳智子、岡村典子、井上智代、北村千章

Ⅰ．活動概要

１．上越地域看護研究発表会の開催

上越地域の看護職の連携を図る目的で、新潟県立看護大学看護研究交流センターと新潟県上越地域振興局健康福祉環境部の共催で開催され、113 名の参加者であった。平成 26 年度は第 1・第 2 ホールで行い、全て口頭発表とした。

平成 25 年度に引き続き上越地域の各病院や地域に所属する看護職員が臨床の場で取り組んできた研究発表に対して活発な意見や質問がされ「やる気が見える!!上越の看護」というテーマの目的を達成することができた。

1) 発表プログラム

日時：平成 26 年 9 月 20 日(土)　場所：新潟県立看護大学　第 1・第 2 ホール

口演　第 1 群　9：35～10：05

座長　井上智代(新潟県立看護大学)

A-1　バースプランを活用した分娩教育～入院中の切迫早産妊婦を対象に～
○田中亜裕美(上越総合病院)

A-2　退院調整看護師の活動と今後の課題
○山田佐智子(新潟労災病院)

A-3　上越地域の在宅医療の現状と課題～実態調査から～
○飯塚俊子(上越地域振興局健康福祉環境部)

口演　第 2 群　10：05～10：45

座長　矢坂陽子(上越地域振興局健康福祉環境部)

B-1　フローチャートを活用したマウスケアの有効性
～口腔内環境に合わせたマウスケアへの取り組み～
○片田奈美子(上越総合病院)

B-2　実践報告　A 病院糖尿病フットケア外来の 6 年間の歩みと今後の課題
○守橋克枝(県立中央病院)

B-3　夜間透析患者の生活状況に関する実態調査
～勤労と治療の両立に向けた支援を目指して～
○大山奈緒美(新潟労災病院)

B-4　治療と就労を支援するチーム医療
○佐藤温美(新潟労災病院)

口演　第 3 群　10：55～11：25

座長　井上聡子(さいがた医療センター)

C-1　緩和ケア病床における看護の取り組み～緩和ケア病床でお茶会をスタートして～
○平井正博(上越地域医療センター病院)

C-2　エンゼルメイクの現状と学習会前後の知識の変化
○岡村光子(新潟労災病院)

C-3　C 病院における看取りの現状～アンケート調査からの考察～
○宮崎奈々(知命堂病院)

口演　第 4 群　　11：25～11：55

座長　竹之内美良(新潟労災病院)

D-1　目標設定シートを用いた行動変化の実態と行動改善効果
○山﨑愛(さいがた医療センター)
D-2　認知症患者の便秘解消への取り組み
○馬嶋将人(川室記念病院)
D-3　リスク予見の取り組みの効果と看護師の意識・行動の変化
○諏訪貞徳(三交病院)

---

2)　上越地域看護研究発表会実行委員会の活動

上越地域振興局健康福祉環境部、新潟県立看護大学看護研究交流センター地域課題研究開発部門(以下大学とする)が実施主体となり、上越地域の病院、保健所、市役所等の看護職員による実行委員会を編成、運営した。企画実行委員会は、3 回(反省会、次年度計画を含む)開催し(平成 26 年 5 月 15 日、7 月 31 日、11 月 20 日)看護研究発表会実施に向けて、各病院・市町村などの状況を考慮して、テーマや演題募集について検討を重ねた。

【平成 26 年度上越地域看護研究発表会　実行委員会】

(1) 第 1 回実行委員会：平成 26 年 5 月 15 日(木)16 時～16 時 45 分

場所：上越保健所第 1 会議室

出席者(敬称略)：上越地域振興局福祉環境部　矢坂、飯塚、布施
実行委員　井上、竹之内、米川、岩崎、平野、荒川、荒梅
看護大学　石田、髙柳、岡村、井上、北村(書記)、長谷川

・上越地域振興局福祉環境部副部長よりご挨拶
・自己紹介

＜議事＞

1.発表会の企画について（担当：布施課長代理)

・実行委員会は今年度も年 3 回開き、準備から評価までを行い、来年度につなげていく。
・26 年度の上越地域看護研究発表会のテーマについては、「やる気が見える、上越の看護」として、ポスター上にも掲示する。
・ポスターは早急に作成し、発表会当日の午後に予定されている地域課題研究発表会についても、ポスター上に掲示してもらう。
・ポスターの配布は、昨年までの各施設への電子媒体での配布では全体的に浸透されにくいので、今年度からは、仕上がったカラー版のものを、大学からの配布物と一緒に郵送で各施設に届けるような方法に変更する。(長谷川職員担当)
・発表形式については、会場の都合上、ポスター掲示ではなく口演形式で行う。
・平成 26 年度上越地域看護研究発表会の演題募集締め切りは 7 月 22 日とする。

2.今後の進め方・役割分担

・詳細については、次回の会議で検討し決定する。
・展示ブースの業者とパン屋には、昨年同様に依頼する。
・当日のお茶については、大学の予算から参加者全員に配布できるようになった。

・今年度は、5 周年を迎えるので特別な企画を実施したらどうかと、大学の事務局から打診があるため、次回の会議までにその内容について各自で考えてくることとなった。

(2) 第 2 回実行委員会：平成 26 年 7 月 31 日(木)16 時～17 時
場所：上越保健所第 1 会議室
出席者(敬称略)：上越地域振興局福祉環境部　矢坂、飯塚、布施
実行委員　井上、竹之内、米川、岩崎、平野、荒梅、荒川
看護大学　石田、髙柳、北村、長谷川、井上(書記)　(欠席　岡村委員)

〈議事〉

1.発表演題の応募状況

・現在 13 演題を受け付け。県立中央病院でキャンセルおよび追加の可能性もあり、8 月 5 日までに演題数確定させ、看護大へ連絡する(必要時追加抄録も送付のこと)。当日はホール 1 と 2 を開放し一会場で実施する。

2.プログラム及び抄録集の作成について

・オリエンテーションは、9 時 25 分の開会前に行い、開会の挨拶は学長 2 分程度とする。また、閉会の挨拶は、例年通り大学交流センター長に依頼することとなった。

・本日の実行委員会前に大学に届いた抄録は、すでに大学の教員で査読を行った。発表者からの加筆・修正後、9 月 8 日までにメール添付で送信する。長谷川職員担当(大学)の方で 200 部印刷する。

3.研究発表会当日の役割分担について

役割	担当者	
総合司会	石田(大学)	
座長	矢坂(上越 HC)：成人・老年	井上(大学)：母性、地域
	井上(さいがた)：精神	竹之内(労災)：老年
タイムキーパー	米川(中央)	荒梅(川室)
会場 IT 担当	岡村(大学)北村(大学)	
受付※	髙柳(大学)平野(柿崎)荒川(知命堂)	
会場担当	北村(大学)岩崎(上総)布施(上越 HC)	

※学生アルバイト 4 名：大学で確保する(岡村委員担当)

4.今後の進め方について

・発表者のパワーポイントデータは当日各自で持参していただく
・スタッフは 8 時 30 分集合
・発表は 8 分とするが、伸びたら質疑応答はなしとする

5.その他

・特別席の準備は学長、センター長の 2 名分を準備
・アンケートは、上越 HC でまとめ、結果を受け取る
・当日の参加業社 3 社の予定
・つくし工房にパンの販売依頼(北村委員担当)
・大学でお茶を準備する(200 本)(北村委員担当)

・今年度は、各施設等へチラシと一緒に演題も送る
・スタッフの名札は交流センターで準備する

(3) 第 3 回実行委員会：平成 26 年 11 月 20 日(木)16 時～17 時
場所：上越保健所第 1 会議室
出席者(敬称略)：上越地域振興局福祉環境部　矢坂、飯塚、布施
実行委員　井上、竹之内、米川、岩崎、平野、荒梅、荒川
看護大学　石田、髙栁、長谷川、北村(書記)　(欠席　岡村委員、井上委員)

〈議事〉

1.看護研究発表会の反省・評価について

1)　平成 26 年度実施要項について

・抄録の内容も毎年充実してきていて、全体的には良い発表会になった。
・当日の朝、大学の入り口が開いてなかったため、来年度は少し早めに開放できるようにする。
・座長の打ち合わせが会場内になってしまったため、別室で時間を決めて行うが良いのではないかという意見があったため、来年度の担当者で打ち合わせ方法を検討する。
・発表時間については、オリエンテーション通りに進行できていたのでよかった。

2)　発表会のテーマについて

・テーマは良かった。
・ポスターに表示した、地域課題研究発表会についての質問が多かったため、来年度はポスター上で掲示方法を工夫する。

3)　実施日時、演題募集等日程について

・看護協会の催しと重なる可能性があるので、日程を確認してから決定する。
・来年度は、9 月 26 日(土)か、10 月 3 日(土)のどちらかに開催する予定とする。
・PR 方法は大学でカラーポスターを作成し、今年と同じように交流センターの他部門の事業で各施設に案内を送るときに同封する。
・ポスターには地域課題研究発表会についても記載する。

4)　発表会の内容について

・看護大と一緒に研究に取り組むという方向性が定着してきている。
・今後もたくさんの部署からの発表を薦めていき、演題数が多くなった場合は、ポスターセッション等も取り入れていく。

2.来年度の開催について

・平成 27 年 9 月 26 日(土)10 月 3 日(土)の両日を、大学で場所の確保しておく。

２．25 年度地域課題研究発表会の開催

1)　発表プログラム

日時：平成 26 年 9 月 20 日(土)13:00～14:40
会場：新潟県立看護大学 第 1・第 2 ホール

＜第 1 群＞　　座長　　髙柳　智子(新潟県立看護大学)

1.精神科病棟に勤務する熟練看護師に備わっている能力調査　13：05
—半構成的インタビューを通して—
独立行政法人国立病院機構さいがた医療センター　鈴木　亮

2.魚沼地域ケアスタッフの口腔ケアに対する意識の実態　13：15
新潟県立小出病院　関　栄子

3.再発乳がんに罹患している配偶者の妻に求める要因　13：25
新潟厚生連長岡中央綜合病院　三浦　一二美

4.在宅酸素療法患者の継続看護システムの運用と評価　13：35
—慢性期 HOT 患者への介入を試みて—
新潟県立中央病院　高橋　栄子

＜第 2 群＞　　座長　　石田　和子(新潟県立看護大学)

5.生活習慣病予防のための効果的な保健指導における保健師の能力　13：55
上越市三和区総合事務所　小林　奈緒子

6.医療ニーズのある利用者を介護する主介護者の介護負担に関する研究　14：05
栃尾郷診療所居宅介護支援事業所　片山　圭子

7.在宅 ALS 患者を受け持つ介護支援専門員の心理的負担を軽減させる　14：15
ための保健師の支援
新潟県十日町地域振興局健康福祉部　富井　美穂

8.腹膜透析を行う高齢者の家族の負担　14：25
独立行政法人労働者健康福祉機構新潟労災病院　池田　圭子

３．平成 26 年度　地域課題研究の申請状況

新潟県内の保健・医療・福祉に携わる看護職を対象に公募した地域の看護実践での研究課題について 9 件の応募があった。

申請者	所属	学内責任者	研究テーマ
高松 真美	水原郷病院	岡村 典子	A 病院における看護・介護職の研究に対する思いと今後の支援
長澤 聡子	長岡赤十字病院	飯田 智恵	静脈血栓塞栓症予防のための看護ケアに関する知識と看護実践の実態と課題
林 美姫子	新潟厚生連糸魚川総合病院	髙柳 智子	心臓リハビリテーション導入患者の QOL 向上を目指した看護ケア
宮島 さおり	新潟医療生活協同組合　木戸病院	竹原 則子	内視鏡による検査・治療過程において看護師が感じる危険因子
関根 愛実	新潟医療生活協同組合　木戸病院	渡邉 千春	混合病棟に勤務する看護師の終末期ケアに対する困難感とやりがい
樋口 伸子	新潟県立中央病院	石田 和子	がん化学療法に伴う吃逆の身体・心理・社会的影響における実態調査

坂詰 朱美	新潟県厚生連上越総合病院	髙島 葉子	新生児の臍消毒は有効な臍帯ケアかどうかの検討
飯田 明美	新潟労災病院	酒井 禎子	上越地域における透析患者支援状況の実態調査～介護支援専門員へのアンケート調査から～
新保 憲一	新潟県立柿崎病院	原 等子	認知症高齢者に対する生活リズムを整えるケアの効果～生活機能再獲得のためのケアプロトコールを活用して～

４．平成 27 年度　地域課題研究の申請状況

新潟県内の保健・医療・福祉に携わる看護職を対象に公募した地域の看護実践での研究課題について 12 件の応募があった。(公募期間：平成 26 年 10 月 1 日(水)～平成 27 年 1 月 30 日(金)16 時まで)

〈活動内容〉

1) 公募要領の作成

公募要領、研究計画書、研究計画書記入要領、研究選定基準、申請内容変更届、地域課題研究辞退届を作成し活用した。

2) 広報活動

新潟県内の保健・医療・福祉関係(約 500 か所)に公募要領を郵送するとともに、新潟県立看護大学看護研究交流センターHP に掲載し地域課題研究公募の広報活動を実施した。

3) 内定通知の発送

選考委員を選定し、3 月下旬に研究代表者へ採択通知を発送する予定である。

Ⅱ．平成 26 年度の評価と今後の展望

上越地域看護研究発表会は、前年度と同様に地域課題研究発表会と同日に土曜日に開催した。午前が上越地域看護研究発表会、午後に地域課題研究発表会を行った。上越地域看護協会の行事と異なる日にすることや研究発表会の連絡を郵送にて行うようにした結果、参加者総数は前年と比較しやや多くなった。また、前年度同様に自分の施設の発表のみの参加が見られた。

昨年度から業者の協力を得て展示ブース、大学院のブースを設けた。参加人数は少なったが展示ブースは盛況であった。次年度も展示ブースを設けていきたい。

地域課題研究については､新潟県内の保健･医療･福祉の看護職から 12 件の応募があった。今年度は、看護職が応募しやすい期間の設定として上越地域課題研究発表会に合わせて公募した。公募締切りまでには 4 件の応募があった。しかし、目標数に及ばなかったため 1 か月間公募の延長を行った。次年度は公募期間の設定は同様に地域課題研究発表会に合わせて公募し、さらに公募活動として地域の新聞などに掲載するなど検討し地域の看護職者の研究の取り組みを発展支援していきたい。

資料 1－平成 26 年度上越地域看護研究発表会終了後アンケート結果

参加者　　113 名　（うちスタッフ 16 名）

回収数　　69 枚　（回収率 61.1%）

1．運営について

1)　会場の広さについて

①ちょうど良かった 53 名　　②もっと広い会場が良かった 0 名

③もう少し狭い会場が良かった 13 名　　無回答 3 名

2)　プレゼンテーション機器(マイク、スクリーン)等の配置について

①適切だった 61 名　　②改善すべき点がある 6 名　　無回答 2 名

[②を選んだ方へ　具体的に]

・マイクを持たないで発表できるとよい。

・パソコンが低くて操作しにくかった。

・会場内テレビスクリーンはもう少し高い位置がよい。

・パソコンやマイクの使い方の補助者は手前にいて補助した方がよかったと思う。

・スクリーンが近くて見えにくかった。発表者のマイクは固定した方が発表しやすいのではないか。

・マイクの調整、マイクを持って発表するのは大変。

3)　発表会の案内方法について

①とてもよい 27 名　　②よい 39 名　　③より工夫が必要 2 名　　無回答 1 名

[③を選んだ方へ　具体的に]

・ポスターの案内が午前、午後とまぎらわしい。

2．発表について

1)　発表時間について

①時間は適切だった 64 名　　②時間に改善、工夫が必要だった 2 名　　無回答 3 名

[②を選んだ方へ　具体的に]

・発表時間 10 分に

2)　質疑応答の時間について

①時間は適切だった 51 名　　②時間に改善、工夫が必要だった 15 名　　無回答 3 名

[②を選んだ方へ　具体的に]

・もう少し時間が取れると良い。

・演題の数が多い。演題の間隔がもう少し長くても良い。

・質疑内容を途中で切ってしまうことがあったので全体にもう少し余裕があるとたくさん質問があった場合に対応できると思う。

・群ごとで質問を受けてはどうか。

・質問の時間は発表とは別に 1～2 分あったらいいと思った。

・時間配分には余裕をもたせ休憩時間もしっかりとっていただけるとよい。

・途中で質疑応答を中断しなければならないのはせっかくの質問が台無し。

・地域看護として相互共有に向けた時間を多めに取って欲しい。

3．発表内容について

①分かりやすい 44 名　　②やや分かりやすい 19 名　　③やや難しい 1 名

④難しい 0 名　　無回答 5 名

4．プログラム全体について

①とてもよい 21 名　②よい 41 名　③より工夫が必要 4 名　無回答 3 名

[③を選んだ方へ　具体的に]

・時間配分、余裕をもって休憩時間を取れるように。

・休憩時間がもう少し長くてもよいのではないか。

5．発表会全体について

①満足 33 名　②やや満足 30 名　③やや不満 0 名　④不満 0 名　無回答 6 名

6．発表者にフィードバックしますので、発表内容についてのご感想をお聞かせください。

・パワーポイントは見やすくわかりやすかった。発表は声の大きさもちょうど良く聞きやすかった。

・緩和病棟のお茶会、四季がわかるように継続をエンゼルメイク→死後の皮膚の変化など具体的にわかるとうれしい。

・検証について、もう少し深いところが聞きたかった。研究のテーマと研修内容が一致していることか大切だと思う。

・発表スライドの文字の大きさ(細い)が見えにくいところがあった。資料の作成時に確認すると良いと思った。

・今回は労災病院からの発表テーマが多く、職員の研究的視点での業務の取り組み意識の向上に驚きました。その組織の取り組みを知りたいと思いました。

・今後の看護にも実践できそうな内容もありとても勉強になった。

・方法や対象がよくわからないものがあった。

・忙しい中での研究、お疲れ様でした。

・地域と病院の連携が必要だと思いました。

・緩和ケア病棟の取り組みをきき患者や家族に紹介できると思った。基本的な看護援助が効果を及ぼす発表にはとても勇気づけられ、IT 化されている中で、やはり看護の原点はこのような援助だと思えた。

・死後の処置はエンゼルメイクのみだけにとどまらず全身ケアを考えて欲しいです。皮膚ケア等。

・退院調整に苦慮しているので参考になった。マウスケアの報告も参考になった。

・様々な研究があり参考にしたいと思いました。

・退院調整看護師など、当院としても取り組みたい内容など聞けて良かった。看取り、エンゼルメイクなど自分の家族で体験したので興味深く聞くことができた。

・上越地域の現状が反映された内容だったと思います。

・興味深いテーマでよくまとめられていました。ご苦労様でした。

7．発表会全体を通してご意見がありましたらお聞かせください。

・日頃、勤務では考えていなかったようなことで、この研究会にて気づくことが多くあった。身近なテーマで実行できそうな内容でたいへん良かった。

・病院と地域との連携について取り組み発表が多くなったと印象を受けた。

・初めて参加しましたが、他病院の取り組みなどがわかって良かった。もっと多くの参加があればよかったと思う。

・スタッフの皆さんお疲れ様でした。
・今後も毎年継続し開催されることを期待します。
・これからの研究の参考になりました。
・参考になる発表もあり今後の看護にいかしていきたいと思いました。
・各施設、機関の相互交流の場として盛り上げていただきたい。
・多くの領域から発表があり、学ぶことが多くありました。
・参加者が少なくて残念だった。
・発表会の運営お疲れ様でした。ありがとうございました。
・せっかくの発表会なのでもっと参加者が多ければ良かったのではないか。PR の仕方もあるのでは。興味深い発表が多く今後の業務の参考になった。
・寒すぎた。
・上越ではこのような会があり、お互いに情報共有ができてうらやましい。

資料 2－平成 25 年度地域課題研究発表会終了後アンケート結果

参加者　　67 名（うち学内 18 名）
回収数　　32 枚（回収率 47.7%）

1．運営について

1)　会場の広さについて

①ちょうど良かった 26 名　　②もっと広い会場が良かった 0 名
③もう少し狭い会場が良かった 4 名　　無回答 2 名

2)　プレゼンテーション機器(マイク、スクリーン)等の配置について

①適切だった 26 名　　②改善すべき点がある 5 名　　無回答 1 名
[②を選んだ方へ　具体的に]
・ハンドマイクは持つ、と決めておいた方が聞きやすい。
・パワーポイントのスライドの作成の仕方によってだと思いますが、文字が小さいものが多いので、スクリーンがもう少し大きいと良いと思いました。黒板の大きさが決まっているので難しいとは思いますが。
・スライドが明るくて、見えにくい。
・発表者マイクの音にムラがあった。
・マイクスタンドの利用。

3)　発表会の案内方法について

①とてもよい 11 名　　②よい 21 名　　③より工夫が必要 0 名　　無回答 0 名

2．発表について

1)　発表時間について

①時間は適切だった 27 名　　②時間に改善、工夫が必要だった 5 名　　無回答 0 名
[②を選んだ方へ　具体的にどの程度なら良いでしょうか]
・AM とちがい、もう少し時間が長い方がよい。もう少しくわしくききたかった。
・発表者は時間を守る。
・もう少し発表時間が長くてもよい。
・発表する方が、後半、早口になるのが少し気になりました。

2)　質疑応答の時間について

①時間は適切だった 29 名　②時間に改善、工夫が必要だった 2 名　無回答 1 名

[②を選んだ方へ　具体的にどの程度なら良いでしょうか]

・どのくらいの量かはいえないですが、少しディスカッションの時間を…。

・ディスカッションの時間が短い。

3．発表内容について

①分かりやすい 13 名　②やや分かりやすい 17 名　③やや難しい 1 名

④難しい 0 名　無回答 1 名

4．プログラム全体について

①とてもよい 14 名　②よい 18 名　③より工夫が必要 0 名　無回答 0 名

5．発表会全体について

①満足 16 名　②やや満足 15 名　③やや不満 1 名　④不満 0 名　無回答 0 名

6．発表者にフィードバックしますので、発表内容についてのご感想をお聞かせください。

・各々地域の問題について正面から取り組んでいる事がよく分かった。

・折角の発表ですので、もう少し視覚に訴えるようなパワーポイントがあるとより良かったと思います。文字ばかりで少し疲れました。

・口腔ケアについては、介護職の方への指導が重要であると思いました。

・看護、介護の地域へのシフト化が医療の社会の中で急速に進むなか、ケアスタッフ、介護家族へ視点を向けた研究は、意義あるものと感じます。今後も継続した研究を進めてください。

・とても興味深く、社会的にもニーズのあるテーマでの研究が多かったと思います。

7．発表会全体を通してご意見がありましたらお聞かせください。

・AM につづき、市町村や産業分野からも発表があるとよい。

・このような研究発表へのバックアップと発表の場を与えてくれて、ありがたいと思います。

・本当は発表したかったのですが、私は精神の分野なので、発表しても伝わらないと思い、発表しませんでした。難しいと思いますが、ある程度分野に分けた発表会の場も用意してもらえると嬉しいです。例えば、「精神と地域」…など。

・多くのことを学ぶことができました。ありがとうございました。

・全ての発表が、現在の地域医療の課題に密接に関連した内容であり、興味深く聞かせていただきました。秋田から参りましたが、高齢者の多い秋田においても同様の課題を抱えており、今日拝聴した内容を今後に生かさせていただきたいと思います。

・参加者が増えると良いと思いました。

8．職業について

①会社員・・・・・ 0 名　②自営業・・・・ 0 名　③主婦・・・・・ 0 名

④保健・医療職・・23 名　⑤福祉職・・・・ 0 名　⑥教育職・・・・0 名

⑦大学生・院生・・ 1 名　⑧大学教職員・・ 4 名　⑨その他・・・・0 名

無回答・・・・・ 4 名

Ⅰ　特別研究部門

永吉雅人、平澤則子、加城貴美子、水口陽子、野村憲一、髙柳智子、原等子、飯吉令枝、酒井禎子、髙島葉子、エルダトン・サイモン、小林綾子、山田真衣、井上智代

１．特別研究部門の経過

特別研究部門は、2010 年(平成 22 年)1 月に上越で行われた移動知事室において本学渡邉学長から「都会で生活している人たちが、上越地域の自然に触れ、人々と交流しながら健康な生活と安心できる福祉を考えるきっかけをつくる事業」としてメディカルグリーンツーリズムが提案され、平成 22 年度より活動を開始している。昨年度までは杉田収前特別研究部門長を中心に主としてメディカルグリーンツーリズム事業を実施してきた。今年度は、メディカルグリーンツーリズムに、「卒業生支援」に関する研究グループおよび「地域政策課題」研究グループを加え、新たな 2 グループについては立候補でメンバーを募って活動を開始した。

２．平成 26 年度の組織

特別研究部門では、以下に示すグループメンバーで活動してきた。なお、〇印のついたメンバーにグループリーダーとして中心となって活動して頂いた。

１）メディカルグリーンツーリズム
　水口陽子、酒井禎子、小林綾子、〇山田真衣、

２）卒業生支援
　加城貴美子、原等子、〇髙島葉子、永吉雅人、エルダトン・サイモン、

３）地域政策課題
　平澤則子、野村憲一、〇髙柳智子、飯吉令枝、井上智代

３．おわりに

次章より平成 26 年度の特別研究部門として、「メディカルグリーンツーリズム健康改善・リフレッシュコース「健康交流研修」赤倉温泉入浴によるリラックス効果」、「メディカルグリーンツーリズム首都圏に在住する勤労世代の健康ニーズ調査」、「卒業生支援」、「地域政策課題」について、それぞれの主たる担当メンバーが報告する。

特別研究部門では、研究ということもあり予定通りに進まないことが多くあった。それにも関わらず、粘り強く活動頂いている各グループリーダーをはじめメンバーの皆様、またご理解とご協力を頂いている本学看護研究交流センター関係者の皆様に感謝申し上げる。また最後に地域の皆様のご協力に改めて感謝申し上げる。

II メディカルグリーンツーリズム
健康改善・リフレッシュコース「健康交流研修」
赤倉温泉入浴によるリラックス効果

山田真衣、水口陽子、酒井禎子、小林綾子、永吉雅人

1 はじめに

メディカルグリーンツーリズムは看護研究交流センターの特別研究部門事業として、平成26年度開業予定の北陸新幹線の活用を視野に入れ、平成22年度から始められた。この事業は上越地域の自然環境と医療・看護・福祉に関する資源を用いて、都市部と農山漁村に暮らす人々の交流から、地域の活性化と「双方の人々の健康」を目指している。

平成26年度は、赤倉温泉の入浴のリラックス効果について調査研究を実施した。今年のツアー主催は妙高市と北名古屋市であり、健康交流研修の一環として平成26年10月16日から18日までの3日間で実施された。本学は10月16日に実施された赤倉温泉 滝の湯への入浴によるリラックス効果を評価する調査研究の部分を担当・協力した。

過去3年間の健康改善・リフレッシュコースでは妙高高原での森林セラピーとノルディックウォーキングの科学的なリラックス効果を評価 [1)]、さらに昨年は気候療法ウォーキングの評価を実施した。これまでは、森林セラピーロードを歩くことによるリラックス効果について検証してきたが、今年度は、赤倉温泉の入浴のリラックス効果について検証した。

評価の方法はこれまでと同様に唾液アミラーゼの活性値測定 [2)]と POMS(Profile of Mood States)の調査 [3)]に加え、唾液中クロモグラニン A[4)]を用いて実施した。

2 平成26年度健康交流研修の概略

○実施日：平成26年(2014年)10月16日(木)から10月18日(土)の2泊3日

○行程等：(初日)善光寺見学、いもり池・妙高高原ビジターセンター見学(池の平)、温泉ソムリエ講話(赤倉ホテル ANNEX)、田端屋泊(妙高・杉野沢温泉)

(2日目)気候療法ウォーキング(笹ヶ峰高原)・健康セミナー・レクリエーション、温泉療法(赤倉温泉)、リラクゼーションセミナー、新赤倉館泊

(3日目)野菜収穫体験(大洞原)、調理体験(妙高山麓都市農村交流施設)、妙高山麓直売センターとまとで買い物、岩の原葡萄園見学

○参加者：北名古屋市いきいき隊所属の30名

○主　催：妙高市と北名古屋市

○協　力：新潟県立看護大学看護研究交流センター

3 温泉入浴前後のリラックス評価

1）唾液中クロモグラニン A

(1)サリベットと言われる唾液採取用スピッツで唾液を採取し、(株)矢内原研究所に検査依頼を行う。

(2)調査のタイミングは、赤倉温泉入浴前後の2回とする。

図1　サリベット

（3）唾液中クロモグラニンＡの特徴である､精神的ストレスにより濃度は上昇するが、肉体的ストレスに対して反応性が乏しい性質を使用し、測定値を分析する。

2）唾液アミラーゼの活性測定

（1)測定は(株)ニプロ　唾液アミラーゼモニターと専用チップを使用する。

（2)参加者 2～3 名のグループ毎に 1 名の測定者が測定する。

（3)測定のタイミングは赤倉温泉入浴前後の 2 回とする。

（4)測定方法は唾液採取からくり返して 2 度測定する。得られた 2 個の測定値が大きく乖離した場合は 3 度測定する。乖離の大きさ判定は、使用したモニターの同時再現性の変動係数(CV)は約 10%であるので、1 度目の測定値(A)と、2 度目の測定値(B)の差が A±3CV×A を超える測定値は大きな乖離と判定して棄却する。乖離した測定値は棄却して、残り 2 個の測定値を平均する。また 3 度目の測定値も大きく乖離した場合は 4 度測定し、最も小さい測定値と最も大きい測定値を棄却して残り 2 個の測定値を平均する。

3）POMS 調査

（1)POMS(短縮版)を使用し、その調査用紙に参加者自身が記入する。

（2)調査のタイミングは、赤倉温泉入浴前後の 2 回とする。

（3)調査後の分析は、POMS の素得点を計算し、項目ごとに気分プロフィール換算表を用いて、素得点から T 得点(標準化得点)を算出する。参加者の事例ごとに、緊張－不安(T-A 得点)、抑うつ－落込み(D 得点)、怒り－敵意(A-H 得点)、疲労(F 得点)、混乱(C 得点)、活気(V 得点)から算出する T 得点と、それらの項目の上昇・下降のパターンに注目して分析する [3)]。

図 2　唾液アミラーゼモニターでの測定

図 3　POMS 調査用紙への記入風景

4　温泉入浴の実施

1）方法

（1)入浴方法などの説明は一切おこなわず、好きなように入浴していただいた。

５ 赤倉温泉入浴前後における調査結果

温泉入浴後の唾液アミラーゼ平均活性値には上昇傾向が認められた。個々の参加者では実施後に活性値が低下した方が 4 名、逆にアミラーゼ活性値が上昇した方が 5 名いた。唾液アミラーゼ活性値は交感神経の活動指標として用いた。そのため、体力の差がある可能性がみられた男女差の相関を見たところ、相関係数は 0.156 であり、唾液アミラーゼ活性値と性別には相関はみられなかった。

唾液中クロモグラニン A については、10 名全員が入浴後の値が低下していた。このことから、入浴によりストレスが解消されていたことが明らかとなった。

入浴後の POMS 調査の結果は、「緊張」「疲労」「活気」の低下がみられ、「混乱」のみ上昇がみられた。入浴したことにより、「緊張」や「疲労」といた心理的なストレスは解消されたため、それに伴い「活気」も低下したのだと考える。「混乱」の上昇については、測定時の参加者の意見で「岩風呂で、どこに岩があるか見えなくて困った」や「足元がごつごつして歩きづらかった」などが聞かれ、混乱が生じたのだと考える。景観も重視している岩風呂ではあったが、平均年齢 71.4 歳のシニア世代には不安や混乱の一因になった可能性が考えられた。

参加者全体の平均値から、赤倉温泉に入浴したことで唾液中クロモグラニン A を低下させ、POMS 調査では心理的なストレスは解消されたことからリラックス傾向が認められた。また、唾液アミラーゼ活性値より、入浴による疲労がストレスとは関係しない可能性が示唆された。

謝辞

妙高市から調査費用と協力者募集にご尽力を頂いた。特に丸山氏(妙高市観光商工課観光振興グループ)には御世話になった。また、大学内外からも御協力をいただいた皆様に深く感謝申し上げる。

文献

水口陽子，山田真衣，永吉雅人，他(2008)：森林セラピー及びノルディックウォーキング参加者の心身反応に関する研究－シルバー世代の反応－. 医学と生物学, 156(4)，212-217.

山口昌樹，吉田 博(2005)：唾液アミラーゼ活性による交感神経モニタの実用化，Chemical Sensors ，21(3)，92-98.

横山和仁(2005)：POMS 短縮版 手引と事例解説，金子書房，東京.

中根英雄(1999)：新規精神的ストレス指標としての唾液中クログラニン A, 豊田中央研究所 R&D レビュー，34(3)，17 - 22.

III メディカルグリーンツーリズム
首都圏に在住する勤労世代の健康ニーズ調査

酒井禎子、小林綾子、山田真衣、水口陽子、永吉雅人

１．はじめに

本学看護研究交流センター特別研究部門では、平成 22 年度より「上越地域の自然環境と医療・看護・福祉に関する資源を用いて、都市部と農山村部に暮らすひとびとの交流を活発にし、双方の『ひとびとの健康なくらし』をめざそうとする取り組み」と定義した「メディカルグリーンツーリズム」の概念に基づいた研究活動を行ってきた。平成 27 年春の北陸新幹線の開業が予定されている今、新幹線の利用者となりうる首都圏在住者の来県につながる「メディカルグリーンツーリズム」のあり方を検討していく必要がある。

本調査では、首都圏在住の 30 代から 50 代の勤労世代を対象としたヒアリング調査を行い、対象が求める健康情報や健康資源にはどのようなものがあるか、そして、上越地域の観光資源に対してどのような認知・関心をもっているかを探索することを通して、上越地域におけるメディカルグリーンツーリズムに期待される要素を検討することとした。

２．調査方法

研究対象は、首都圏在住者で、30 代～50 代の勤労世代である一般市民であり、調査協力の同意が得られた者とし、研究者の知人や学内関係者の協力を得て紹介された便宜的抽出法を用いた。調査期間は平成 25 年 9 月から平成 26 年 6 月、データ収集方法は、対象者の都合のよい日時・場所で半構成的インタビューガイドを用いた面接法を実施した。インタビュー内容は、①日ごろ関心をもっている健康トピックス、②上越地域の観光資源に関する関心、③上越地域で行うメディカルグリーンツーリズムに期待することで構成し、②の上越地域の観光資源に関する関心については、研究者が挙げた主な観光資源 14 項目に対する関心の程度を 5 段階で解答してもらった。なお、調査に先立って、本学倫理委員会の承認を受けた(承認番号 013-05)。

３．結果

本調査の対象者は計 16 名(男性 4 名、女性 12 名)であり、年代は、30 歳代が 4 名、40 歳代が 7 名、50 歳代が 5 名であった。居住地は、東京 9 名が最も多く、次いで、神奈川、埼玉、群馬が各 2 名、千葉が 1 名であった。

１）関心のある健康トピックスについて

対象者の最近の健康状態や関心のある健康トピックスとしては、肥満や生活習慣病の予防のため、あるいは最近感じ始めた疲れやすさ・体調の不具合などをきっかけに、現在の生活における運動不足を認識し、スポーツクラブに通ったりウォーキングをしたりすることを心がけながらも、仕事の忙しさなどから定期的な運動習慣につながらないことを気にかけていることがあげられた。食事については、対象者の多くが、野菜を多く食べる、腹八分目にす

るといった自分なりの食生活の工夫を心がけていた。これらの健康トピックスに関する主な情報源は、テレビの情報番組や雑誌・新聞、インターネット、友人・知人からの口コミなどがあげられた。また、肌の美容に関することやサプリメント・市販の健康食品に関心をもっている、あるいは有機栽培の食材を買うようにしているという声もあった。

２）上越地域の観光資源への関心

上越地域のイメージとしては、「雪」「温泉」「自然」「海産物」「スキー」「上杉謙信」が主なものであった。上越の観光資源 14 項目に対する関心を 5 段階で回答を求めた結果は図 1 のとおりであった。‘とても関心がある’‘まあまあ関心がある’と答えた者が多かったのは、上位より「上越野菜・海産物などの食」「温泉」「森林セラピー」の順であった。運動では、森林浴や癒しの要素もある森林セラピーに関心が高まった。地元の人たちとのふれあいに関しては、旅先での地元の住民との何気ない会話の中に楽しい思い出ができたり、そこでしか得られない情報が聞ける、生活や歴史などの地域の文化に触れるといったことが楽しみにされていた。

３）メディカルグリーンツーリズムに期待すること

1 泊 2 日から 2 泊 3 日で、温泉や自然の中での運動、地元の食が堪能できて健康につながるような、体にいい食・運動・リラクゼーションなどを包括的に体験できるツアーに対する期待は高く、またそのプログラムにある程度の自由度があり、希望にあわせた選択肢があるものがいいという意見があった。一方で、ダイエットや体力向上などのテーマがあり、一定の期間の中で成果が得られるような滞在型ツアー、あるいは温泉やレジャーも楽しめるオリジナリティのある人間ドックツアーへの関心もみられた。これらのツアーにおいては、ただ楽しむだけではなく、健康増進や自己治癒力を高めるような生活をしたいと望む人たちのためのプロジェクトであってほしいという期待が語られていた他、ツアーの中で健康に関する情報が得られたり、自宅に戻ってからも手軽に始められるような運動を取り入れられるといいといった意見もあった。

アクセスにおいては、上越妙高駅に到着してからそれぞれの観光地への移動手段を心配する声も聞かれ、北陸新幹線開業後も車やバスでの来県を希望する人もいた。上越妙高駅発のツアーバスやコミュニティバスの運行、地図を見ながら貸自転車で回ることができるとよいという意見があげられた。

その他、障害者や食事制限の必要な慢性病を持っている人、高齢者、子ども、あるいは一人で参加しても楽しめるような対象者の多様なニーズにあわせたツアーの工夫、その季節しか見られない、その土地特産のものが食べられるなど、他の観光地では味わえない上越地域のオリジナルな体験の PR、そして、リピーターを増やすためのシリーズ化された企画などのアイデアが得られた。また、集客においては、インターネットで検索した人の興味を引くことや、テレビの情報番組での視覚的な情報発信が有効ではないかとの意見もあった。

４．おわりに

首都圏在住の勤労世代において、本地域における豊かな自然や温泉・食に対する関心は高く、これらの資源を活かした包括的な健康増進ツアーに対する期待も高いことがうかがわれた。来県者の増加をめざすためには、首都圏から近い他の温泉地や観光地では得られない本地域独自の魅力や、これらの資源の健康へのエビデンスをいかに発信していくかということなどが課題として示唆された。

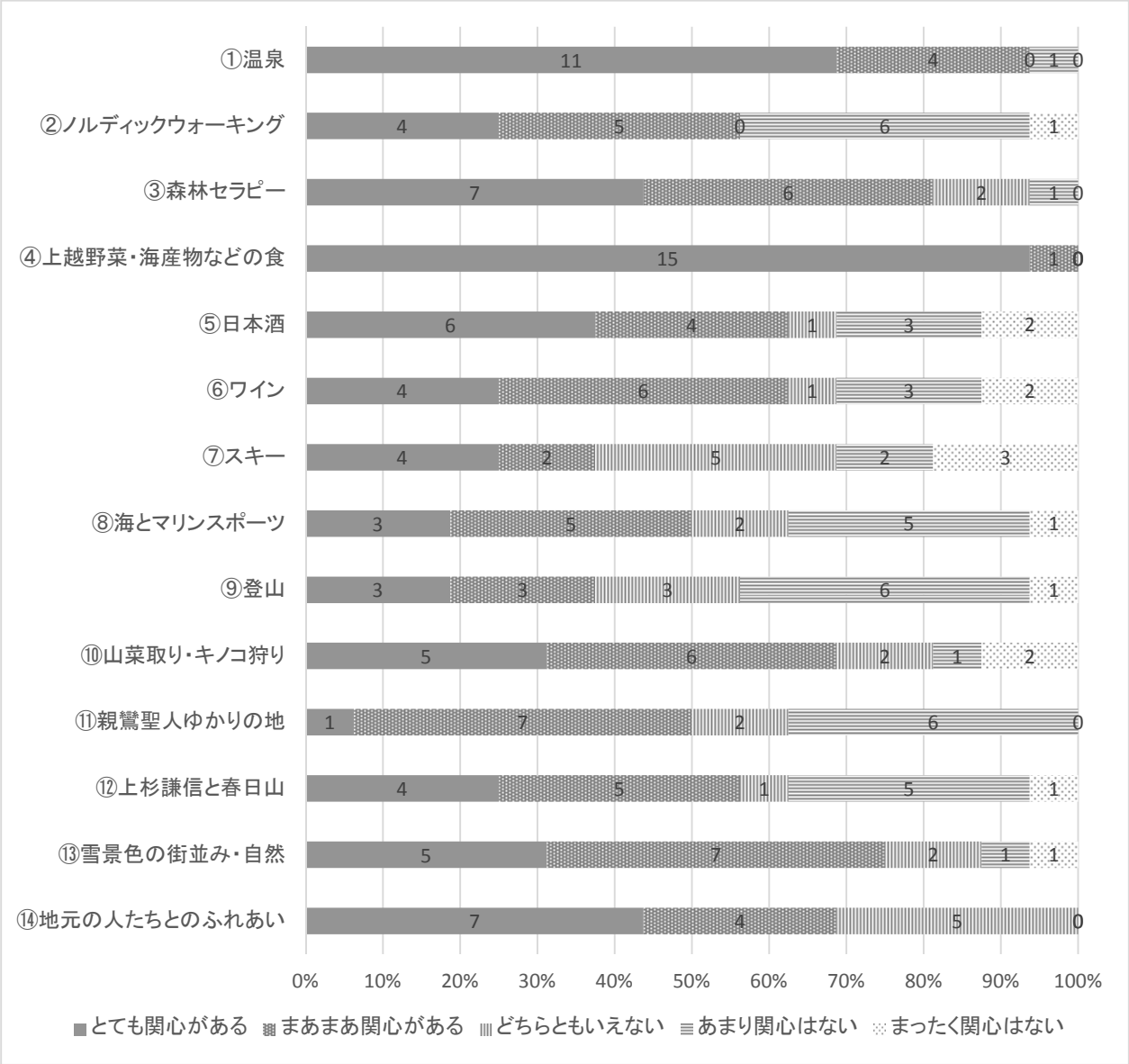

図１　上越地域の観光資源に対する関心(n=16)

Ⅳ　卒業生支援

髙島葉子、永吉雅人、エルダトン・サイモン、原等子、長谷川ヒデ子、加城貴美子

1　卒業生支援研究グループの発足

本研究グループは以下のような本学における卒業生支援の現状を認識したうえで、卒業生支援のために、卒後動向の把握および支援ニーズを明らかにすることを目的として、今年度より特別研究部門に新たに発足し、活動してきた。

1）卒業生支援の現状の認識

新潟県立看護大学(以下、本学)は、1994 年(平成 6 年)4 月新潟県立看護短期大学を前身として 2002 年(平成 14 年)4 月開学した。新潟県内における他看護系 3 大学が新潟市を中心としているのに比して、上越地域唯一の看護大学として地域の医療の医療従事者の供給体制に貢献してきた。

本学における入学者の内訳は、開学 2 年後 2004 年(平成 16 年度)当初は県外者が 2 割、県内者が 8 割であったが、2010 年入学者の割合は県外者が約 3 割、県内者は約 7 割となり、県外者が 1 割程増加している。就職状況を見ると、2014 年 3 月の県内就職と県外就職の割合はほぼ 5 割で、県外入学者は県外に就職し、県内入学者の 2 割が新潟県外に就職している。

本学では、卒業までの就職・進学に関する支援は国家試験就職委員会や学生委員会、4 年次の専門ゼミナールなどにおいて組織的・個別的になされてきた。しかし、卒業生に対する支援体制の必要性が議論にはのぼるものの、具体的な形として整備されていない。

2）卒業生の支援ニーズ

新潟県においては、平成 24 年度に新潟県内看護基礎教育機関を 2007 年以降に卒業し県外に就職した 818 名を対象とし、就業状況等実態調査を行っている(高林ら、2012)。回答のあった 244 名(回答率 29.8%)のうち、中でも大学卒業生の望む卒業後の支援として、「職務に役立つ研究や講演会開催」、「転職や進学についての支援」、「悩んだ時に気軽に相談できる窓口」、「図書館の開放」、「看護研究の支援」を望んでいることが明らかとなった。この調査からは県内の大学卒業生の県外就職者のニーズの一端はうかがい知ることができるが、本学における卒業生の支援ニーズは不明である。

2　活動の概要

1. 4 月 28 日　第 1 回会議　卒業生支援に関する文献検討　問題の抽出　年間計画
2. 6 月　2 日　第 2 回会議　研究計画書作成　テーマ、目的、研究方法等の検討
3. 7 月 17 日　第 3 回会議　研究計画書作成　調査項目、調査説明書、同意書等の検討
4. 9 月 18 日　第 4 回会議　研究計画書　倫理審査申請書　検討
5. 11 月、12 月の倫理審査委員会に提出したが、住所の取扱いにおいて問題があるとの指摘から、承認されていない。現在、同窓会長との協議を進めており、実施には至らず。

V 地域政策課題

髙柳智子、野村憲一、飯吉令枝、井上智代、永吉雅人、平澤則子

1 地域政策課題研究グループの発足

本研究グループは、「健康・福祉のまち」として充実していくための地域の課題を行政・関係機関と協働して政策的にまとめていくことを活動目的として、今年度より特別研究部門に新たに発足した。

2 活動概要

長岡市栃尾地域の医療過疎地区に暮らす人々の食生活の実態調査を同市栃尾支所保健師と共同で実施した。3 地区 112 世帯より協力が得られ、現在データ分析作業を行っている。今後、栃尾支所保健師と協議しながら、調査結果報告ならびに当該地区の保健政策への提案を行っていく予定である。